

EU研修を通しての生徒の育成

白梅学園清修中高一貫部 教諭

鯉沼 一美

白梅学園清修中高一貫部では、4年生（高校1年生）になるとEUへ2週間の海外研修を実施する。2010年5月19日～6月2日の間で実施されたEU研修の滞在場所は、オーストリア、スイス、フランス、ドイツ（ケール）と多岐に渡っている。異文化理解・フィールドワークにおける学習・他者との交流など現地ではか得られない体験を通して、生徒の成長を期待している。

オーストリアでは国連本部、シエーンブルン宮殿、ウィーン旧市街を中心に周った。スイスでは登山鉄道でユングフラウヨッホに登り、雄大な自然を目の当た

りにして感動を覚え、首都ベルンやルツェルンを巡り、歴史的な建造物や風景を見ることができた。パリではヴェルサイユ宮殿やルーブル美術館、エッフェル塔やシャンゼリゼ通り、凱旋門と見所が目白押しである。さらびやかな宮殿を見て歴史に思いを馳せ、さらに一歩踏み込んでシエーンブルン宮殿とヴェルサイユ宮殿を比較し、構造的違いを学習する。

その日本とは異なる国民性や異文化を肌で感じ、「なぜ」の視点を常に持ち、教科書だけでは得られない実体験をすることで、世界を身近に感じることができるようになる。そして新しい発見と価値を見出し、

国際社会において自ら考え行動する力を養っていく。

EU研修中に一番長く滞在するのは、フランス・アルザス地方である。5泊6日という研修中では一番長い滞在期間である。あまり日本では知られていない地域だが、歴史上、フランスとドイツを行き来するような背景を持っていた地域である。ここではフランス屈指のストラスブール大学で日本学を学んでいる学生が、チューターとして7人前後で構成された各グループに1人つき、行動を共にした。この方々は大変勉強熱心で、年齢が近いこともあり、生徒たちはよい刺激を受けることができた。生徒一人ひとりが日本の既成概念と異なる背景を持つチューターと触れあい、物事の思考基準を形成していくきっかけづくりとなる。多様な人々とのコミュニケーションを通じて、自己の立ち位置を見定めていくことが目的である。

共に訪れる場所は、RICOH工場（株式会社RICOHの海外拠点）、コルマール、ストラスブール大学や旧市街、強制収容所、欧州評議会と多種多様である。そしてアルザスにおける文化や政治、経済の体験をした後に、毎夜チューターの方々との対話を通じた振り返りを行った。チューターとの話で気付いたことをまとめ、一日の体験で疑問に思ったことを自己発信し、立ち止まって熟慮するのである。

アルザス・ロレーヌ地方の強制収容所やメモリアル、マジノ線といった極めて歴史的背景が複雑な場所を訪れた日のことである。生徒たちはその日の振り返りにおいて、実に様々な思考が交錯し、自身の思いを相手と共有したいが、伝える言葉が出てこないもかしさを感じていた様子であった。今、頭の中に残っているものは何かというテーマでディスカッションを始めた。「どう伝えたらいいか分からない」「怖かった。とにかく、色々考えてしまおう」といった言葉がポツポツと聞こえ始め、各グループにおいてチューターを中心として考えを練り上げていく作業を、丁寧に行っていたのが印象的であった。非日常空間における感情の揺さぶりは、机上の空論ではなく実物やその光景から感じ取ったことからくるものであったようだ。

チューターと過ごした日々は、強烈な印象を放ったようである。それを物語るエピソードとして、アルザス研修出立前日のさよならパーティーと、最終日の別れの朝のことが挙げられる。パーティーでは初め和やかに会が進められ、プレゼントの交換をして会話を楽しんでいた。宴もたけなわ、あちこちですすり泣く声がか聞こえる。最後は非常に感極まったパーティーとなった。「学ぶ姿」のよき手本となっていたチューターの方々から、得るものは大きかった。人への細やかな配慮・心遣いを持った行動は生徒達も見習

うべきところが多くあり、それを感じ取ることができただろう。このパーティー一つとっても、「教育的配慮のある内容かどうか。ふざけた内容となっていないかどうか」「一人ひとりが楽しめる企画となっているか」といったことまで検討した上で開催していただいている。

アルザス研修の初めのうちはお互い距離があり、中には「一緒にいたくない」と思っていた生徒もいたようだが、その壁は徐々に取り除かれていった。別れの朝には、駅まで見送りに来てくれたチューターの方々と、また涙である。他者への思いやりや対応を、身をもって学ぶことが、何よりの生きた教材であり、必要な力である。研修終了後も、お互い連絡先を聞いていてメールのやりとりといった交流を持っているようである。また、チューターの中には私達が帰国後に来日され、本校を訪問してくださった方もいる。自国のみにとらわれない、グローバルな視点を持った方々と交流を深めていくことは、経済や社会がますます国際化していくこの世の中で、非常に有益な感覚を養うことになっていくだろう。

EU研修は、様々な方々の協力の上に成り立っている。先に挙げたアルザス研修におけるチューターはもちろんのこと、添乗員として全行程付き添っていた

いた方、各現地でのガイドの方、プログラムの計画段階から携わってくださったスタッフの皆様などである。年代の異なる方々と接することで、ロールモデルとしてその生き方を学ぶことができた。他者への感謝の気持ちを前提として、人への配慮を心がけていくことは、生徒たちに是非とも具現化してほしい行動である。

また、生徒たちは非日常空間の中で集団生活を送る。自分勝手な行動をしていると、当然それは自身に跳ね返ってくる。規範意識を持ち、集団における個々の責任を持つことが大切である。今回の研修では、それに関わるいくつかの場面に遭遇することがあり、日本の学校生活では見ることのできない生徒の様々な行動特性を見る機会があった。これは教員である私にとっても大きな収穫である。人の長所と短所、それらは表裏一体である。その生徒が伸びる部分を見つけ出し、研修後の指導に活かしていきたい。

研修は、ただ参加するだけで終わらない。自らの体験をもとに、パワーポイントや写真を活用してプレゼンテーション形式で報告の機会を持つ。下級生と保護者に対して、現地での行動グループで発表をしている。効果的に、要点をまとめて発表するという作業は、自身を見つめ直すよい契機となる。さらに下級生

にとつては、いずれ訪れるE U研修に対して心構えが出来ると共に、研修に向けての参加意欲を向上させる場となっている。研修で学んだことを発表の場面を通して、アウトプットしていくという作業は、今後のあらゆる機会に活用していきたい。

また、個人の取り組みとしてはE U研修論文の作成がある。これは各自がテーマを一つ決め、研修の集大成として制作するものである。本校では2年次に3週間の英国研修を実施しており、帰国後にリサーチペーパーという研修論文を作成している。4年次では、過去に作成した論文よりも、さらに一歩進んだ内容となることを期待している。今までの自分を乗り越えて、新しいステップへと進むことで、さらなる深い思考へと高めていくことが目的である。

世界から見た日本、日本から見た世界、周りから見た自分、そして今後どのように生きていくのかを考えるこの研修は、自分の将来を切り拓くことにもつながっている。これは本校の教育理念「気品とフロンティア精神」の育成にも関与している。高校1年生のこの時期で体験したことが、この先の人生において行動するときのエネルギーとなることを願っている。
